

2019年 西洋中世学会第11回大会 (於大阪市立大学)

## ポスター報告要旨

報告者1：後藤 彰 Akira GOTO

所属：東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野 修士2年

発表題目：17世紀中葉フランスにおけるクリアンテルと外交行政

英文タイトル：Clientage and Administration of Foreign Affairs in the Middle of the 17th Century France

R.メッタムの宮廷派閥論以来、貴族の保護—被保護の関係（クリアンテル）から近世フランス宮廷政治を捉える試みが進められている。ルイ14世親政期を対象とした従来の研究は財政・軍事分野に集中しており、外交の中核を担った外務卿ユグ・ド・リオンヌについての研究は少ない。主権国家体制下卓越した外交成果を残したリオンヌが築いたクリアンテル、彼が主導した外交行政の特徴を、中世からの変革という点を踏まえつつ捉えてみたい。

報告者2：高木 麻紀子 Makiko TAKAGI

所属：東京藝術大学

発表題目：15世紀前半のストラスブールのタペストリーにおける聖俗のあわい

英文タイトル：Between the Sacred and the Secular: Strasbourg Tapestries in the First Half of the Fifteenth Century

中世末期ドイツ語圏のタペストリーのなかでも、ストラスブールを中心とする現フランス領アルザスに由来するタペストリー群は、当時主流であったキリスト教主題の枠組みから逸脱した周縁的、世俗的テーマが多く見出されるという特異性をもつ。本報告では、特に15世紀前半のストラスブールのタペストリーに注目し、中世末期の世俗美術の展開という観点からその図像を考察する。そこには聖俗のあわいと言うべき特質が確認でき、また、フランス文化圏とドイツ文化圏を繋ぐ結節点としてストラスブールの意義が浮かび上がるだろう。

報告者 3 : 桑原夏子 Natsuko KUWABARA

所属 : 日本学術振興会特別研究員-SPD / 早稲田大学

発表題目 : ジョット作《聖母の埋葬》の図像と構図の波及力について

英文タイトル : Giotto's "Burial of the Virgin" and its Iconographical and Compositional Impact on Italian Art

ジョットの描いた《聖母の埋葬》(1305年—1309年頃、ベルリン、国立絵画館所蔵)には、足つきの石棺、聖母の体を墓に収める使徒、聖母の体を包む布を持つ天使が描かれ、埋葬の瞬間だけではなく、聖母のお眠りとよみがえりも暗示されていると考えられる。この3点のモチーフに着目し、本作品から図像を引用したものと構図を写したものとを区分した調査結果を示す。この作業を通して、本作品の図像と構図がそれぞれどのような波及力を持っていたのかを詳らかにする。

報告者 4 : 永井 裕子 Hiroko NAGAI

所属 : 日本学術振興会特別研究員 PD (九州大学大学院人文科学研究院)

発表題目 : 「ボルジアの間」でのバルトロメオ・ディ・ジョヴァンニの絵画制作

英文タイトル : Bartolomeo di Giovanni and His Mural Paintings at the Borgia Apartment

15世紀末にヴァチカン宮殿「ボルジアの間」に描かれた壁画には、フィレンツェの画家バルトロメオ・ディ・ジョヴァンニが関与したとされてきた。バルトロメオは、ポッティチェリなどの下請けとして作品制作を任された画家で、元請けの親方が変わるたびに彼らの作品を模倣して絵画制作を行っていた。本発表では、バルトロメオ介入の可能性が考えられてきた壁画における具体的なフィレンツェ的図像を指摘し、このような下請け画家が様々な模倣を組み合わせていた制作実体を考察する。

報告者 5 : 阿部 晃平 Kouhei ABE

所属 : 立教大学大学院文学研究科史学専攻

発表題目 : 9-10世紀における学問区分論の革新

英文タイトル : Innovation in Division of Knowledges from the 9th to the 10th Century

中世を通じた学問区分の規範としては「七自由学芸」(文法・修辞・論理・算術・幾何・天文・音楽)がよく知られているが、それらを包括するより上位の学問区分論が古代ギリシアより継承されてきた。これは現代の大学における学芸学部の分類にも通ずるものであるが、本報告では9世紀から10世紀にかけて現れた古代の伝統を逸脱する新たな学問区分論について紹介し、その区分が暗示する当時の学問の在り方について考察する。

報告者 6 : 三浦 麻美 Asami MIURA

所属 : 中央大学

発表題目 : 女子修道院における知的営み : ヘルフト修道院の事例より

英文タイトル : Intellectual Culture in Female Monastery; The Case of Helfta

修道院は西洋中世では大学と並ぶ知的活動の拠点だった。その実態や理論的背景の解明が進む中で、写本作成を始め女子修道院の貢献も指摘されつつある。この活動は 13 世紀以降特に盛んとなり、日常の典礼から修道院改革まで大きな影響を及ぼした。本ポスターは 13 世紀末ドイツ、ザクセン地方のシトー会女子修道院ヘルフトで女性たちが書いたテキストに注目し、伝統的修道院神学との関わりを考察することで文化面から新たな評価を試みる。

報告者 7 : 安藤 さやか Sayaka ANDO

所属 : 東京藝術大学美術学部 教育研究助手

発表題目 : 書物の装飾と機能 ——西欧初期中世彩飾法典写本の研究——

英文タイトル : Function and Decoration of Books: a Study on the Illuminated Legal Manuscripts of the Early Middle Ages

『ランゴバルト法典』や『サリカ法典』をはじめとして、西欧初期中世の法典写本は単に文字によって書かれただけでなく、しばしば立法者の像等が扉絵として描かれたり、イニシアルによって装飾をほどこされた。本報告では、カロリング朝期に制作されたものを中心に彩飾入りの法典写本を幾つか取り上げ、挿絵の形式を分析し図像の手本を探求することで、それらが法典を記した書物に於いて果たした機能や役割を考察する。

報告者 8 : 近藤 真彫 Mahori KONDO

所属 : 宝塚大学 東京メディア芸術学部

発表題目 : 初期シトー会の写本挿絵におけるエクレスシアの擬人像

英文タイトル : Personification of Ecclesia in early Cistercian manuscripts

《シトーの聖書》(ディジョン市立図書館)は、1109-11 年頃にシトー修道院長ステューヴン・ハーディングのもとで制作された。このなかの『雅歌』の挿絵にはエクレスシアを示す女性擬人像が描かれているが、その図像研究においては『エステル記』冒頭イニシアルのエステル像との繋がりが指摘されている。本報告では、主にこれらの作例の特殊な表現に注目し、初期シトー会においてエクレスシア像に託された意味と聖母マリアとの関連を考える。

報告者 9 : 加藤 政夫 Masao KATO

所属 : 学習院高等科

発表題目 : 高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界— : 事例⑨「歴史的思考力とは何か？」

英文タイトル : European Medieval History in High School History Education: What is “Historical Thinking”?

学習指導要領や大学入試改革などの議論の際に、「歴史的思考力」という言葉が使われることが多い。しかしその際、「歴史的思考力」がどのようなものであるかという定義づけが示されずに議論されることが大部分のようである。今回のポスターセッションでは、「歴史的思考力」とは何かということについて、私なりの考えを示し、来場者と意見交換を行いたい。またそのことを通じて、次年度のポスターセッションでとりあげる予定である「歴史教科書のあり方」というテーマを議論するための準備ともしたい。

報告者 10 : 石田和生 Kazuki ISHIDA

所属 : 京都大学大学院文学研究科西洋史学専修 (M2)

発表題目 : 中世後期フィレンツェの都市政治におけるアルビッツィ家の役割

英文タイトル : The role of the Albizzi family in city politics in late medieval Florence

アルビッツィ家は 14 世紀後期から 1434 年の政変によるメディチ体制樹立に至る寡頭政期においてメディチ家と並ぶ有力家門であった。しかし、フィレンツェ政治史研究においてはメディチ家の研究が中心でアルビッツィ家の研究は十分とは言えない。そこで本報告では政変以前においてアルビッツィ家の中心人物であったリナルドの記した都市業務に関する史料を基にアルビッツィ家が都市政治において果たした役割を考察する。

報告者 11 : 北舘 佳史 Yoshifumi KITADATE

所属 : 中央大学

発表題目 : クレルヴォー修道院の死者記念

英文タイトル : Remembering the dead at Clairvaux abbey

シトー会修道院クレルヴォーにおける死者記念について考察する。シトー会は初期には外部の人間に対する祈祷や埋葬といった活動に対して制限的であったが、時代が下るに連れて徐々に受け入れるようになったことが知られている。証書や殉教者歴や祭壇・埋葬書を主要史料とし、近世以降の訪問記録も参照して、周年記念祷の対象者や修道院内に埋葬された人や場所について検討することで修道院の死者記念のあり方について明らかにしたい。

報告者 12： 福田智美 Tomomi FUKUDA

所属： 東北大学大学院文学研究科博士前期課程

発表題目: エリザベス 1 世期のセシル親子のネットワーク

英文タイトル： The Network of the Cecils in Elizabethan

ウィリアム・セシルとロバート・セシルは親子 2 代でエリザベス 1 世に重鎮として仕えた。当時このように、2 世代で権力を握った例は珍しい。彼らの権力は人的紐帯に依拠していた。それゆえ、権力の継承は人的紐帯の引き継ぎによるところが大きいと思われる。

本報告では、彼らの人的紐帯の継承の実態を明らかにする第一段階として、ロバート・セシルの書簡 (Calendar of the manuscripts of the Most Honourable the Marquess of Salisbury) からセシル親子の人的紐帯を再構築する。

報告者 13： 小林亜沙美 Asami KOBAYASHI

所属： レーゲンスブルク大学歴史学部西洋史講座 Assistant Professor (Akademische Raetin)

発表題目： 教皇裁判権に訴えた俗人の原告たち-13 世紀の公証人登録簿から見る実態

英文タイトル： Secular plaintiffs in papal courts - actual practice in the notary register books of the 13th century

教皇裁判に訴える権利は基本的に聖職者に限定されていたが、教会法は一部俗人にもその権利を与えていた。十字軍従事者、未亡人、孤児、貧者である。彼らは教皇裁判にどのような訴えを起こしていたのか、彼らの訴えは裁判において実際どのように処理されていたのか、これら裁判のあり方は教会法により規定されていたが、その実態はどうだったのか。この点についてその一例を 13 世紀の公証人登録簿から明らかにする。

報告者 14： 佐伯 (片倉) 綾那 Ayana SAEKI-KATAKURA

所属： 大阪市立大学大学院 文学研究科 都市文化研究センター

発表題目: ビザンツ帝国における「ポルフェラ」

英文タイトル： The maternity room for empress, “Porphyra” in the Byzantine Empire

ビザンツ帝国の宮殿に存在した「皇妃のための産室」に注目する。この部屋はポルフェラと呼ばれる大理石でつくられていた。ポルフェラ色は、ビザンツ帝国において皇帝の色として重んじられてきた。本報告では、「皇妃のための産室」が建てられた場所とつくりに関する記事を叙述史料からとりあげ、ビザンツ帝国におけるこの産室がもつ価値の変遷を検討する前段階としたい。

報告者 15 : 貝原 哲生 Akio KAIBARA

所属 : 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター

発表題目 : 7-8 世紀エジプトにおける修道院と奉獻子

英文タイトル : Child donation to a monastery in seventh- and eighth-century Egypt

エジプト南部ルクソールのナイル川を挟んだ対岸にはかつて聖フォイバンモンの名を冠した修道院があった。同修道院に関しては 7 世紀から 8 世紀にかけて作成された数多くの文書が発見されているが、そのうちの 20 通余りではこの修道院に子どもを奉獻することが誓約されている。「奉獻子」は中世ヨーロッパにおいても見られる慣習であるが、本報告ではアラブ・ムスリムの支配下に入って間もないエジプトにおいて子どもを修道院に捧げる行為がいかなる意味を持ち得たのかを考察する。